

埼玉県熊谷市立熊谷図書館に於ける児童図書サービスの歴史と現在

新藤 透

1 はじめに

児童図書館は、乳幼児、児童などの子供を主な利用者として、資料・情報提供サービスを行う図書館である。公共図書館の中では、児童サービスの場として設けられている児童部門を指しており、児童室または児童コーナーとして設けられている場合が多い。(中沢編, 2004, p. 13)

児童サービスは、子供達が自分の意思で好きなときに来館して、それぞれの嗜好と発達の段階に応じて、適切な資料を利用する場であり、きわめて重大な責務を負っていると思われる(赤星 / 荒井編著, 2001, p. 15)。

近年は児童図書館の研究も図書館情報学、教育学の分野で発達してきている。しかし公共図書館の児童サービスの報告は、管見の範囲では現在のみをピックアップしている、もしくは図書館史的観点から歴史のみに特化しているものが多く、その図書館の開館以来の歴史を踏まえての現状の報告は、蓄積が未だ少ないと思われる。

そのような問題関心から、小稿では、埼玉県熊谷市立熊谷図書館の児童サービスの歴史を、熊谷市立図書館史と絡めて見ていきたい。

2 埼玉県熊谷市立熊谷図書館児童サービスの歴史

2.1 埼玉県熊谷市の概況

最初に、埼玉県熊谷市について、簡単に説明をしておきたい。

熊谷市は、埼玉県の北西部に位置しており、東京から 64 km 程の所にある。全体的に平坦な地形であり、市内には標高の高いところはないが、南部には江南台地及び比企丘陵の高台がある。市街地の南側には荒川が流れており、中流にあたっている。

人口は、平成 12 年 (2000) 度の国勢調査によると総数 156,216 人で埼玉県内第 11 位であり、内訳は男性 78,491 人、女性 77,725 人となっている。人口増加率は - 0.1% であり、県内第 55

位となっており増加率が著しい県南部に比べて増減が殆どみられないことが特徴である。世帯数は55,030世帯となっている。

産業別就業人口は、第1次産業2,257人、第2次産業22,976人、第3次産業51,412人(平成12年度国勢調査による)となっており第3次産業のウェイトが増加している。

第1次産業である農業は、米麦・養蚕を中心にして畜産などを加えて発展してきた歴史があるが、戦後は東京への通勤圏に入っていることから農地が宅地化されてきている。それらに対応するため、土地整備基盤事業や経営規模の拡大を図り後継者の育成を行っている。第2次産業(工業)は昭和30年代に秩父セメントなどの工場が建設され、また同60年代には熊谷工業団地もつくられ、発展してきている。最も就業人口が多いのが第3次産業(商業)である。熊谷市は県内5ヶ所の広域型商業都市の一つであり、県北の商都といっても過言ではない。本町通商店街などの、江戸時代以来の宿場町の伝統を継承する中心商店街は、郊外の大規模店舗などに客層を奪われているが、最近では商店街独自の町おこし運動も活発に行われている(埼玉県熊谷市, 2005)。

熊谷の歴史は古く、市内には古墳が点在している。源平合戦の時代には武蔵国熊谷郷の武士熊谷直実が平敦盛を一ノ谷の戦いで討ったことは有名で『平家物語』に記されている。江戸時代には中山道の宿場町として栄えた。明治6年(1873)~明治8年(1875)には、県庁が熊谷に置かれ、現在の埼玉県北部、群馬県までをも管轄する「熊谷県」が存在していた。その後幾多の変遷を経て現在の埼玉県となる。明治16年(1883)に、高崎線上野 - 熊谷間(後に高崎まで延長、今日に至る)が開通した。高崎線は日本初の私鉄(日本鉄道)でありその後国有化され、昭和62年(1987)の日本国有鉄道廃止により再び私鉄(QR 東日本)になっている。昭和8年(1933)に埼玉県下2番目の市制施行となり(1番目は川越市)以後周辺の村を合併して今日に至っており平成17年(2005)10月には妻沼町・大里町を合併した。

また、昭和20年(1945)8月14日に、アメリカ軍の空襲を埼玉県内で唯一経験した都市でもある。

2.2 熊谷市立熊谷図書館内児童サービスの歴史

埼玉県熊谷市には、4箇所の公共図書館が存在する(平成17年11月現在)。熊谷市立熊谷図書館、熊谷市立妻沼図書館、熊谷市立大里図書館、埼玉県立熊谷図書館である。は明治末期の設立であり平成17年(2005)10月の市町村合併に伴い、熊谷市立図書館が名称を変更したものでありは昭和40年代の設立で、どちらも館内に児童(以下、小稿では「児童」と特に断りもな記す場合は乳幼児から小学生までを指すことにする)図書室を設置している。は平成17年10月の市町村合併によって熊谷市立図書館に編入された旧妻沼町立図書館である。は平成

17年11月に旧大里町地区に新設された市立図書館である。歴史的観点からいえば、明治から存在する市立熊谷図書館を検討の対象とした方が、興味深いと思われるので、小稿の検討対象と設定した次第である。

以下、熊谷市立熊谷図書館の歴史を概観しつつ、児童図書室の歴史を明らかにしていきたい。熊谷市はかつて市史編纂事業が過去に2回行われたが、現在、本格的な熊谷市史編纂事業が行われており、市立熊谷図書館内に市史編さん室が設置されている。図書館に関しては記述が殆どなく、また市立図書館史を纏める気運も一度はあったようだが、草稿を纏めた段階で終了している。

明治44年(1911)5月19日に高柳二郎、桜沢千歳が計画し、熊谷町立男子尋常小学校内に私立熊谷図書館として開館し、町民に広く利用を求める広告を作成した。それによると「蔵書八約三千冊ニシテ中ニ八臍ノ宿替スル程オモシロキモノアリ又一読大知識ヲ得ル程有益ナルモノモ沢山アリマス」とあり、図書は無料で貸し出された。同45年(1912)4月1日から熊谷に所管が与えられ町立図書館となった。大正元年(1912)度の調査によると開館日数346日、閲覧人員565人、一日平均1.63人となっている(熊谷市立図書館編, 1957, p. 8-10)。

さて、児童図書室であるが、最初に確認がされるのは、大正9年(1920)7月10日付けの熊谷町立図書館長高塚幾次郎が大里郡役所に提出した「学第一一九一号」を以て御照会相成候件左記の通り御回答申上候也」の中に「児童部」というものが見られる(高塚, 1920)。詳細は不明である。同13年(1923)度の図書館で行われた行事に「お伽会」がみられる(熊谷市立図書館編, 1957, p. 20)。「児童部」との関連はやはり不明であるが、何らかの関連性は否定出来るものではないと思われる。同15年(1925)度の「図書館要覧」によれば、館内に「児童閲覧室」といふ部屋が存在している。同年度の「図書館要覧」によると、小学生男子の利用者1626人、女子が1078人となっている(熊谷町立図書館編, 1924)。

昭和8年(1933)の市制施行に伴い、熊谷町は熊谷市となり、図書館も熊谷市立図書館となった。昭和初期の市立図書館の様子に関しては史料が乏しく、詳細な実態は不明である。同11年(1936)4月1日現在の蔵書別利用冊数、職業別利用者の調査結果がある。それによると、「児童用図書」の利用冊数が41,228冊となっており、最も多く、次いで「文学」が12,637冊となっている。職業別利用者数も最も多いのが「児童」で48,230人、次いで「鉱業工業」が4,777人となっている(熊谷市立図書館編, 1957, p. 28-30)。この当時の市立図書館は、具体的にどのような活動をしていたのかは、史料が不足していて詳細は不明である。だが、市立図書館の最大の利用者が児童であるというのは、小学生を対象とした何らかの利用促進活動を行っていた可能性はある。同10年(1935)頃と思われる図書館の間取りが書かれている史料があるが、閲覧室は3箇所あり「男子室」、「婦人室」、「児童室」とある(熊谷市立図書館編, 1957, p. 166)。

昭和 16 年 (1941) 12 月 8 日に太平洋戦争が勃発したが、市立図書館は開館し続けた。しかし同 18 年 (1943) ~ 19 年 (1944) の動向は不明である。同 20 年 (1945) に市立図書館の蔵書は、郊外の国民学校 (小学校) や熊谷市役所、市立高等女学校、健康保険組合に疎開し、7 月 1 日から休館となった。戦後は昭和 21 年 (1946) 5 月 1 日に開館した。蔵書数は 7,000 冊、前年比増加 80 冊であった (熊谷市立図書館編, 1957, p. 32-33)。

昭和 27 年 (1952) 8 月から「夏休み移動図書館」、並びに「子供会」を開始している。これに関しては、当時の「図書館要覧」に次のように書かれている。

移動図書館

児童図書 500 冊と幻灯 紙芝居を併用し子供会を開催各地区公民館神社等の境内を利用、子供たちに楽しい一日を与えた

毎日曜日 リヤカー運搬 職員 2~3 名

(熊谷市立図書館編, 1953, p. 13)

とある。また、巻末には市立図書館が行っている活動について簡単に紹介したコーナー (ささやき と名付けられている) が当時あったが、それにも書かれている。

(昭和 - 引用者注) 27 年 8 月に開始 夏休み中は毎日 その他は各日曜毎 各地区公民館等に出張、新しいインキの香りにほう児童新刊書 500 冊は子供会と共に文化にほど遠い農村地区の子供たちに楽しい一日の夢を結ばせた。

(熊谷市立図書館編, 1953, p. 16)

昭和 27 年 (1952) 8 月に開始された「移動図書館」とは、完全に児童対応のものであった。この移動図書館は初年度は、同 27 年 8 月から翌 28 年 (1953) 3 月まで計 31 回実施されたが、利用者は 6,585 人とありかなりの成果を挙げていると思われる (熊谷市立図書館編, 1953, p.13)。児童向けの図書館サービスとしては、他にも「 ささやき 」欄の「その他」の項目に次のようなもの書かれている。

(前略) 人形芝居、紙芝居をもつて慰問にと、兎に角 熊谷図書館は前進とそのつきるところはない

(熊谷市立図書館編, 1953, p. 16)

これを見ると 図書館として人形芝居・紙芝居の慰問活動を行っていた(これが「子供会」の活動と思われる)ことが分かり 最後の一文は当時の図書館員の熱意が伝わる文章である。

また、児童向けの移動図書館とは別に、市立図書館は、市内の会社や、郊外の農村部の公民館などに本を貸し出す「巡回文庫」の活動を、町立図書館時代の大正 6 年 (1917) 6 月から既開始していた(熊谷市立図書館編, 1957, p. 13)。

昭和 42 年 (1967) 度の「図書館要覧」には児童室整備が目標に掲げられており 当時存在した市立図書館分館に児童室がみられる。同 48 年 (1973) 度から本館の方に移転されている。同 54 年 (1979) 11 月に、熊谷市立文化センターが開館し、同センター内 1,2,3 階が市立図書館のスペースに宛てられ、1 階には「こども室」が設置された。同 57 年 (1982) 11 月から自動車である移動図書館さくら号が郊外を中心に巡回を開始した(熊谷市立図書館編, 2004, p. 1)。移動図書館さくら号は今日も、その路線を拡大して活動している。「さくら号」は一般図書・児童図書両方を完備しており、かつてのリヤカーの「移動図書館」のように児童図書に特化しているわけではない。

「こども室」は、昭和 62 年 (1987) 4 月から「おはなし会」、「映画会」を開始している。「おはなし会」は 4 歳以上の子供たちに対して、童話などを話して聞かせるもので、「映画会」は子供向けのアニメーションなどを流すものであり 当初は月 1 回の開催だった(現在は月 2 回)。平成 5 年 (1993) 4 月からは市立図書館全蔵書のパソコン検索が可能になった。現在は OPAC も整備され、インターネットによる図書の予約や、熊谷に関するレファレンス・サービスも電子メールで受け付けている。同 11 年 (1999) 4 月から熊谷市周辺市町村(熊谷市・深谷市・妻沼町・岡部町・寄居町・大里村・江南町・川本町・花園町)との図書館広域利用が開始された。同 14 年 (2002) 4 月からは「おはなし会」を拡大発展させ、小学生を対象とした「小学生のためのおはなし会」を開始し、毎月第 1 土曜日に現在も行っている。同年 5 月には「子ども図書館まつり」を開始した。これは年 1 回行うもので、内容は一日図書館長、図書館見学、司書体験などである。同 16 年 (2004) 4 月からは就園前の幼児を対象とする「ちいさいこのおはなしかい」を開始している。また、その他にも夏・冬・春休み開催の「子ども会」、依頼があった場合に出張する「出張おはなし会」を行っている(熊谷市立図書館編, 2004, p. 2-4)。現在の活動に関しては後述する。

以上、きわめて概説的ではあるが熊谷市立熊谷図書館の児童サービスの歴史を、私立熊谷図書館、熊谷町立図書館時代から見てきた。明治・大正・昭和初期の児童サービスに関しては、史料が不足しており判然とはしなかったが、大正時代から児童専用の閲覧室を設置し、また当時の利用者数 1 位が児童とのことから、何らかの活動を行っていた可能性は高いと思われる。戦後は昭和 27 年 (1952) 度から郊外の農村部を巡回する児童向けの「移動図書館」を行い、児童の図書館利用促進を図っている。熊谷市立熊谷図書館は創立期から、児童サービスにおいては熱心な活動を行っていたと考えられる。同 54 年 (1979) に熊谷市立文化センターが開館し、内部に図書館が移

転した際も、当初から「こども室」が設置されていたことは、そのような伝統があったためであると推察される。

3 現在の熊谷市立熊谷図書館に於ける児童サービス

3.1 熊谷市立熊谷図書館に於ける児童利用者の概要

『平成 16 年度 要覧』(以下、要覧』と略称)によると、平成 15 年(2003)度に熊谷市立図書館(現・熊谷市立熊谷図書館)こども室が所蔵している児童書は、合計 42,795 冊であり、全蔵書数の 20.5% を占めている。紙芝居は 358 冊であり 0.2% である。また、移動図書館「さくら号」搭載の児童書は 12,526 冊で移動図書館全蔵書数の 43.5%、紙芝居は 242 冊で 0.8% を占有している。これを見ると移動図書館蔵書の約半数が児童図書でしめられており、移動図書館が児童図書を重視していることが分かる。

館内の貸出冊数は、児童図書のみで合計 175,752 冊、月平均 14,646 冊、一日平均 634.5 冊である。一般図書は計 252,277 冊、月平均 21,023.1 冊、一日平均 910.7 冊となっている。利用者数は一般・児童と区別して統計を取っていないので不明である。移動図書館の児童の利用者数は延べ 14,547 人、一般は 4,602 人となっており、貸出冊数も児童図書が計 39,185 冊、紙芝居計 1,337 冊となっていて、一般図書計 14,824 冊に比べて児童の利用者が多いことがわかる(熊谷市立図書館編, 2004, p. 17-21)。

館内では一般図書の貸出件数が多いが、児童図書の貸出も活発に行われている。移動図書館では明らかに児童が利用の主体であることが明確に統計数字に表れている。

「こども室」の蔵書構成は、小中学生対象の児童書、幼児向けの絵本、紙芝居などであり、中高生対象のヤング・アダルト(例えばコバルト文庫、電撃文庫など)は一般書として入荷している。また、マンガは継続購入雑誌として『コロコロコミック』、『なかよし』、『りぼん』があるが、てんとう虫コミックス、なかよしコミックス、りぼんマスカットコミックスなどのマンガ単行本は入っていない。他には児童図書の専門書や専門雑誌などを入荷している(熊谷市立図書館, 2004, p. 32)。

3.2 おはなし会

前述したように、熊谷市立熊谷図書館では古くから「児童閲覧室」の設置や、「移動図書館」などの活動を行ってきており、現在でも児童対象の活動を活発に行っている。ここでは、それを紹介しておきたい。

現在の熊谷市立熊谷図書館は職員が18名、司書資格取得者は3名、更に学芸員資格取得者も名である。「こども室」専任の職員は2名であり、両者ととも司書資格取得者である。

『要覧』によると、平成15年(2003)度は「おはなし会」は月2回行われ、他にも「小学生のためのおはなし会」も月1回行われている。合計3回おはなし会は行われた事になる。

平成15年(2003)度の「おはなし会」は、12月を除く月2回で計23回行われており、参加者は延べ子供(4歳以上対象)359人、付き添いの父兄137人である。内容は、図書館司書が行うのではなく、「おはなし会」のボランティア活動を行っている市民グループ(おはなしの会「虹」)に委託して行われている。「おはなし会」とはいえ、単に絵本の朗読を行うのではなく、特に原稿などを持たないで全身を使って表現して子供たちに話して聞かせるという手法である。取りあげる題材としては、例えば同年4月26日に行われた「おはなし会」では「すずめのぼうけん」と猿地蔵が行われたが、これらはどちらも絵本を下敷きにしており、それぞれ「おはなしのろうそく13」と『日本昔話百選』から取っている。「おはなし会」では単に子供たちに話して聞かせるだけではなく、読書への興味関心を持たせるように、関連した絵本の紹介を最後に行っている。4月26日の「おはなし会」では、絵本『りとぐらのえんそく』を紹介している。時間は30分である(熊谷市立図書館編, 2004, p. 23-24)。

平成14年(2002)度から開始された、月1回ペースで開かれている「小学生のためのおはなし会」も、前述のおはなしの会「虹」が行っている。同15年(2003)度は、1月を除く全11回行われた。スタイルは、「おはなし会」と同内容であるが、紹介する絵本などを小学生向けに高めているのが特徴である。9月に行われた「小学生のためのおはなし会」では、「百姓のおかみさんとトラ」で、出典は『子どもに語るアジアの昔話 2』である。また、最後に本の紹介が行われるのも「おはなし会」と同様であり、今回は「トラ」に関連づけて「おちやのじかんにきたとら」を紹介している。

1年間の参加者は延べ小学生56人であり、「おはなし会」に比べて参加者が少ない(熊谷市立図書館編, 2004, p. 25)。これは開始してまだ1年という事も、市民への浸透がまだ不十分であるためと推察され、回数を増やして行くに連れ、参加者が増加していくものと思われる。時間は30分である。

『要覧』にはまだ報告が記されていないが、平成16年度(2004)からは就園前の幼児とその保護者を対象とした「ちいさいこのおはなしかい」も開かれている。これは、0・1歳児と歳児以上と二つのグループ分けをして行っているが、何れも同内容である。手遊び、わらべうた、絵本などである。時間は20分である(熊谷市立図書館こども室, 2005)。

いずれの「おはなし会」も図書館内の視聴覚室で行われている。「こども室」では特に紙芝居や人形劇専門の上演スペースなどはない。

「出張おはなし会」も行われている。これは団体(小学校・児童館・学童クラブ)などから依頼があれば、出張して「おはなし会」を行うというもので、平成15年(2003)度には計4回行われている。出

張先は、8月21日に「雀宮児童館」、10月2日に市立佐谷田小学校内に設置されている「佐谷田学童クラブ」、11月26日には「東児童館」、2月24日には市立佐谷田小学校4年生の「本とのふれあい事業」の一環として招聘されている。「要覧」に具体的な活動内容が記されているのは、「東児童館」と佐谷田小4年の授業である。「東児童館」では、紙芝居「アボカドあかちゃん」、大型絵本「おおきなかぶ」、パネルシアター「カレーライス」を行い、佐谷田小4年では大型絵本「すてきな三人ぐみ」、おはなし「ふしぎなたいこ」、大型絵本「きよたいなきよたいな」、絵本「ねえ、どれがいい?」を行っている。紙芝居や絵本の読み聞かせなどを主体とした活動である(熊谷市立図書館編, 2004, p. 26)。

「春休み子ども会」では「特別おはなし会」が行われている。これは内容は通常の「おはなし会」の拡大版であるが、子ども会の活動の項で後述する。

3.3 映画会

「映画会」もまた、「おはなし会」と同じ時期に開始された子供(幼児～)を対象とした催し物である。月1回毎月第4日曜日に開かれている。平成15年(2003)度は毎月第3日曜日に開かれ年間12回行われており、図書館内の視聴覚室が会場である。内容は全てアニメで1本(90分前後)もしくは各30分前後のアニメを2本上映している。アニメは「日本むかしばなし」や「キキとララ」、「ハローキティ」などである。「ハローキティ」には「シンデレラ」や「おやゆびひめ」などの世界の童話を下敷きにしたものもみられる。参加者は延べ324人、一回あたりに127人となっている(熊谷市立図書館編, 2004, p. 27-28)。

3.4 子ども会

夏休み、クリスマス、春休みと年3回、「子ども会」が開かれている。「子ども会」は市立熊谷図書館こども室の行事の中では最も古く、昭和27年(1952)から夏休みに開かれていた「子供会」にその前身を見出すことが出来る。現在の「子ども会」は図書館職員だけでなく、外部のボランティアの協力も得て実施されている。

「夏休み子ども会」は、平成15年(2003)は8月12、13日に渡って開催され、テーマは「ロボットを動かしてみよう」で、埼玉県立熊谷工業高等学校の生徒の協力もあり実施された。参加者(小学生)は26人であった(熊谷市立図書館編, 2004, p. 26)。同16年(2004)8月5日の「子ども会」では、「科学あそび 手づくりスライムと紙そめ」で、今回は図書館職員が行った(熊谷市立図書館こども室, 2004)。夏休み子ども会」は身近な科学をテーマにした催し物を毎年企画している。

「クリスマス子ども会」は、毎年立正大学の学生サークルである、児童文化研究会によって行われている。平成15年(2003)は、12月25日に開かれ、エプロンを使った劇(エプロンシアターと呼ばれる)「こまったこまったサンタさん」と劇「サンタのがっこう」が行われた。参加者は子供(幼児～小学校低学年)49人、大人25人となっている(熊谷市立図書館編,2004,p.26)。同16年(2004)も12月25日に開かれ、エプロンシアター「おもちゃのチャチャチャ」、パネルシアター「いろいろ色のものがたり」が行われている。時間は1時間で行われている(熊谷市立図書館こども室,2004)。

「春休み子ども会」は、通常の「おはなし会」の拡大版(「特別おはなし会」)を毎年行っている。平成16年(2004)3月30日に行われた「特別おはなし会」の内容は、パネルシアター「まんまるさん」・「ぐれよんのはなし」・「カレーライス」、おはなし「なら梨とり」、大型絵本「ぞらまめくんのベッド」である。参加者は子供(4歳～小学校低学年)35人、大人11人であった。時間は45分である(熊谷市立図書館編,2004,p.26)。

子供の定員は50名ほどであるが、何れの「子ども会」もそれに近い参加者数を得ており、活況を呈している。

3.5 子ども図書館まつり

平成14年(2002)から「子ども図書館まつり」が、毎年5月5日のこどもの日に開かれている。同15年(2004)5月5日実施の内容は、「あなたも一日図書館長」、「図書館まるごとウォッチング」である。

は小学校5・6年生対象で、午前・午後の2回に別れていて、定員は各5人であったが、実際は午前8人、午後4人と参加者が多く、午前においては定員オーバーをしている。時間は2時間15分で、具体的には図書館の中を探検したり、カウンターでの貸出・返却の仕事を体験というものである。

は小学校1～4年生対象で、これも午前・午後の2回に分けて実施されている。内容は「特別おはなし会」で、パネルシアター「まんまるさん」、おはなし「ものいうたまご」、そして卵をテーマにしたブック・トークで絵本「ぞうのホートンたまごをかえす」などの紹介であった。定員は午前・午後各30人であったが、参加児童数は午前14人、午後10人となっている。その他に図書館見学も実施されている。時間は2時間15分である(熊谷市立図書館編,2004,p.26)。

3.6 その他の児童サービス

その他の児童サービスとしては、以下の点を行っている。小学校の総合学習向けにレファレンス・サービスを受け付けている。「お進めブックリスト・子ども室だより」を発行して児童の図書館利用の促進を図っている。小中学校の授業などに対応して図書の団体貸し出しを行っている。

4 おわりに

熊谷市立熊谷図書館の児童図書室の歴史と現在の「こども室」の児童サービスの現状を紹介してきた。同図書館の児童図書室の淵源は、大正時代の「児童閲覧室」に求めることが出来、当時の「図書館要覧」には児童の利用者が最も多いことが判明した。昭和初期には「児童室」となり戦後には、完全に児童向けの「夏休み移動図書館」と「子供会」が行われている。昭和40年代に「児童室」の整備が目標に挙げられ、また同54年(1979)の市立文化センター内に移転するに際しても「こども室」が当初から設置されていたように、同図書館が児童サービスを重要視していたことが、歴史的に見て明らかになったと思われる。

現在の熊谷市立熊谷図書館こども室主催の児童対象の行事は5種類である。同図書館「こども室」では活発に児童を対象にした催し物を行っており、また参加者も定員に近い数を動員出来ていることから、既に市民に定着していると判断出来る。『おはなし会』も市民のボランティアグループ(おはなしの会「虹」)に、「クリスマス子ども会」は立正大学児童文化研究会にと、図書館外の市民グループに委託して行われており、地域との連携も密接に行われている。近年、「おはなし会」は子供の年齢別に3種類に分割し、また「子ども図書館まつり」を開催するなど児童サービスは年々活発になっていることが分かる。しかし、「おはなし会」専用のスペースが「こども室」にないことなど、ハード面での課題が見出された。

謝辞

小稿作成を前に、埼玉県熊谷市立熊谷図書館奉仕係児童図書担当主任高館夕子氏にご協力を賜りました。記して謝意を表す次第です。

引用文献

- 赤星隆子, 荒井督子編著(2001). 『児童図書館サービス論 改訂版』. 千葉: 理想社.
- 熊谷市立図書館編(1953). 『1953年5月増築記念 図書館要覧』. 埼玉: 熊谷市立図書館.
- 熊谷市立図書館編(1957). 『熊谷市立図書館史草稿』. 埼玉: 熊谷市立図書館.
- 熊谷市立図書館編(2004). 『平成16年度 要覧』. 埼玉: 熊谷市立図書館.

熊谷市立図書館こども室(2004). 「夏休み子ども会 科学あそび 手づくりスライムと紙そめ」』.

埼玉: 熊谷市立図書館こども室.

熊谷市立図書館こども室(2004). 「クリスマス子ども会」. 埼玉: 熊谷市立図書館こども室.

熊谷市立図書館こども室(2005). 「3月の催しもの」. 埼玉: 熊谷市立図書館こども室.

熊谷町立図書館編(1924). 「大正15年度 図書館要覧」. 埼玉: 熊谷町立図書館.

高塚幾次郎(1920). 「学 第一 一九一号 ノニを以て御照会相成候件左記の通り御回答申上候也」. 埼玉.

中多泰子編(2004). 「改訂 児童サービス論」. 東京: 樹村房.

埼玉県熊谷市(2005). 「熊谷市の概要」.

<http://www.city.kumagaya.lg.jp/> access date: 2005/10/10